

木野 通信

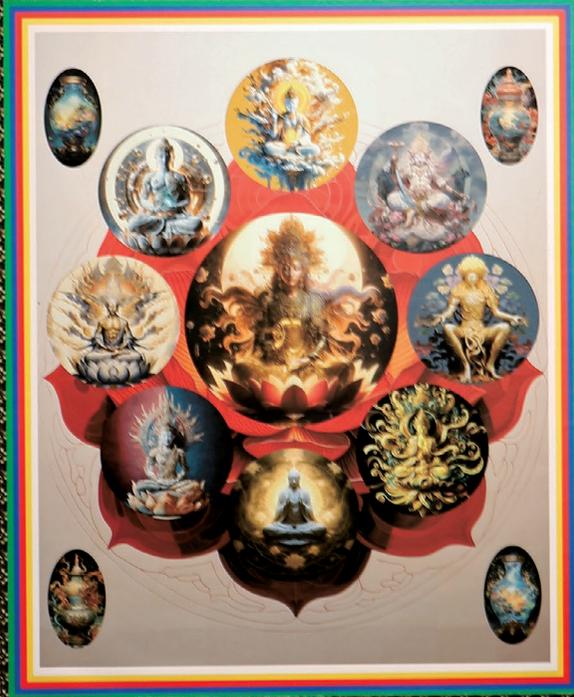
KINO PRESS.
KYOTO SEIKA UNIVERSITY

第83号
2024 Dec.

特集

いまこそ、 人文学！

特別対談 | 鷲田清一氏(哲学者) × 山田創平(国際文化学部学部長)



卒業生インタビュー
高田雄真さん(人文学部卒)
長島聡子さん(芸術学部卒)

特別対談

鷲田清一氏（哲学者）×山田創平（国際文化学部学部長）

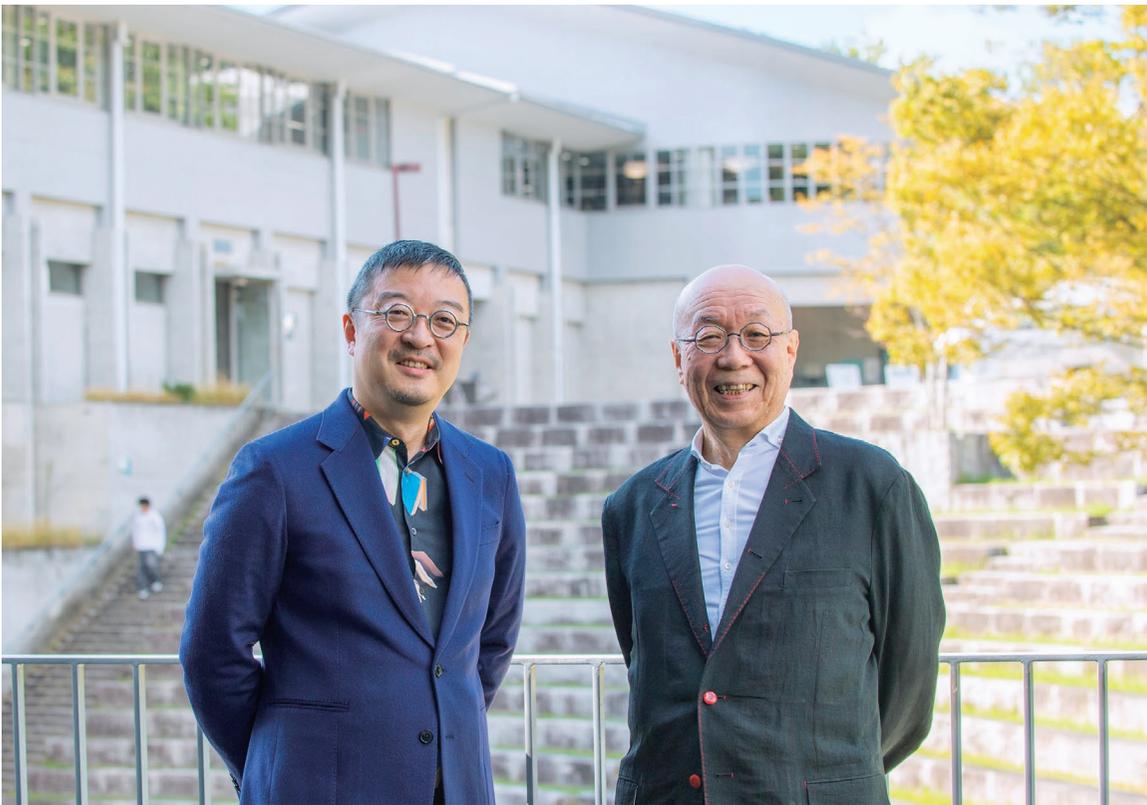
いまこそ、人文学！

京都精華大学は2026年度、国際文化学部を人文学部に名称変更します。（構想中）
1989年から30年余り続いた人文学部が復活するにあたり、「言葉の力」「自由な視点」「リアルな体験」を三本柱に掲げています。
新学部がめざす新たな時代の人文学をテーマに、哲学者の鷲田清一さんを迎え、国際文化学部の山田創平学部長と語り合いました。

激動の時代に誕生し 復活する人文学部

山田 京都精華大学に人文学部ができたのは1989年です。年の初めに昭和天皇が死去し、6月には中国で天安門事件、秋にはベルリンの壁が崩壊した激動の年でした。

2021年、ウスビ・サコ前学長の時に国際的な学びを強化し、カリキュラムを一新。国際文化学部を改組し、グローバルな視点で留学生も増やし…と新たな方向をめざしたんですが、新学部へ動き始めた20年春から新型コロナウイルス感



鷲田 清一 哲学者

京都府出身。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。大阪大学総長(2007～2011年)や京都市立芸術大学の理事長・学長(2015～2019年)を務めた。専門は臨床哲学、倫理学。『モードの迷宮』(ちくま学芸文庫)、『「聴く」ことの一臨床哲学試論』(ちくま学芸文庫)など著作多数。

鷲田 二つの大きな誤解があると思うんです。一つは「文理融合」という言葉が流行ったように「文」と「理」が対立するという考え方。これは大ウソで、(文系に分類される)心理学では自然科学の方法で実験をするし、(理系とされる)建築でも都市計画の分野なんて、ほとんど地域学やデザイン学でしょう。対象はもちろん、方法論からしても、文も理もないんですよ。人文学の「文」には、姿かたち、紋様という意味があります。だから人がなすことの仕組みやありようですね。文理の「理」だって、もともとは石の模様のことです。倫理の「倫」は人間の界のことだから、まさに人間界の模様という意味なんですよ。

山田 人間や社会の肌理(きめ)みたいなことでしょうか。

鷲田 そう。だから文と理は本来同じ意味なんです。それらを分けた上で融合するなんて間違っている。医学もそう。実際の治療法は基礎医学や応用科学やけど、根本には「医の道とは、人を治すとはどういうことか」という思想が必要なんです。

山田 なるほど、その通りです。

鷲田 もう一つは「文学＝虚学」という誤解です。僕は文学部出身で大阪大学の総長をやりましたから、どれだけ言われたか(笑)。阪大は医学部や工学部といった理系が強くて、それらはみんな役に立つ「実学」だと彼らは言うんです。あるいは文系でも政治学や経済学は役に立つけど、文学部と理学部の一部——数学で

すね、これだけは役に立たないと(笑)。だけど、これも間違いです。福沢諭吉は実学の最たるものが「修身」だと言っています。現実と格闘し、人とは何か、人はいかになすべきか、社会はどうあるべきかを探求する学問。今言う倫理学ですね。それこそが一番大事なんだと。福沢の言う虚学とは、机上だけの、つまり現実社会とぶつからない学問のことです。

山田 今の社会で言われている実学とはだいぶ違いますね。

鷲田 正反対ですよ。「先端科学」というのは現代の科学的思考の枠組みのなかでの最先端を競っていて、新着雑誌の論文にしか関心がない。理学部の研究者はニュートンなんか読まない。つまり、特殊な専門領域のなかだけで新しさを競う学問なんです。自分の専門分野にはやたら詳しいけど、それ以外は素人です。そ

山田 創平 国際文化学部 学部長

群馬県出身。名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士課程修了。博士(文学)。専門は社会学(言説分析、表現倫理、マイノリティ論)。編著書に『未来のアートと倫理のために』(左右社)、共著書に『アートの根っこ』(晃洋書房)など。

染症が世界的に広まり、22年にはウクライナで戦争が始まった。最近だとパレスチナ問題も…。また大きな変化の時代に入ってきた時、教員のなかから「やっぱり足元をちゃんと見つめる必要がある」という声が出てきました。本学の学生たちを見ていると、それぞれ悩みや考えたいテーマを持って入学してきます。こちらが「グローバルに活躍する人材を」と目標を与えるより、学生自身がまず自分らしく向き合う方が大事だという意見も根強くある。そこでもう一度、人文学部に名前を戻そうと決まったんです。

「文と理」「実学と虚学」 人文学めぐる二つの誤解

——近年は実学志向が強くなり、人文学にとって順風とは言えない時代ですが、あらためて人文学という学問は、なぜ必要なのでしょう。

ういう意味では、政治も経済も、社会や芸術も、いろんなことに関心を持ち、一つ一つの分野ではアマチュアかもしれないけど、それぞれの歴史も学び、それらを踏まえて総合的に考えるのが人文学だから、現実と向き合うという意味でこっちの方がはるかに実学なんです。

政治も経済も「文化」 体験を通じて探究する

鷲田 実は、大学で扱う学問分野の相当部分は文学部にあって、間口がすごく広いんです。でも国や自治体の言う「文化」って定義が狭くて、古典的な芸術、音楽や文学、伝統芸能などに限られている。僕に言わせれば政治も文化だし、経済や商売のやり方だって文化です。国や地域によって全然違うでしょう。都市の景観や構造なんかも、パリとバンコクと台北ではみんな異なる。関西でも、大阪と京都の街並みはフィロソフィー(哲学)が違うでしょ。政治も文化、経済も文化の一つであり、それぞれに「やり方」があるということが背景に沈み、法や民主主義や人権など、ある意味グローバルな価値観だけで語ることの限界が、今回のガザ(へのイスラエル侵攻)でよく見えたんじゃないですか。普遍的だと思われてきた人権思想が、実は普遍ではなかった。それも西欧発のカルチャーでしかなかったということがある。だから今こそ、政治も経済も文化だという視点で論じることが



必要で、そのためには人文学部に入れば世の中のことが一番よくわかるんじゃないかと(笑)。

山田 そういうことも意識して、セイカの人文学部は、前回の設立時に「行動する人文学」とスローガンを掲げていたんです。同時に学際主義、国際主義、体験主義という3つの方針を打ち出しました。この体験主義はその後ずっと生きていて、うちの学生は在学中に必ず海外などへフィールドワークに行き、自ら計画を立てて調査を行うんです。

鷲田 いいですね。それは必修で？でも費用はどうするんです？

山田 そうです、必修で。留学先の学費は本学が出すんですけど、滞在費用などは学生負担で。そこをめざしてアルバイ

トしてお金を貯める学生もいて、カリキュラムの要になっていきます。お話をうかがっていて私自身はすごく納得するのですが、一方で今の高校生は将来への不安が大きく、「すぐに役立つこと」を勉強しないといけないと思いついていて、そこらへんがあります。就職のためにワードやエクセルを使いこなす、仕事に使える英語を習得する、あるいは資格を取らなきゃみたいな…。そういうなかで人文学部に名前を戻して、ここで学ぼうと思ってもらえるのか、実は懸念もあります。最近の若い人のメンタリティについて、鷲田さんはどう思われますか？

鷲田 メンタリティというか、社会全体の空気なのでしようが、今の時代って「失敗したら終わり」みたいに思われている。大学を卒業してないと就職できない、学校を中退したら履歴書に傷がつくとか。敗者復活しにくい社会だから、一回脱落したら戻れないという空気のなかで、若い人はいろんな選択を迫られている気がします。保険みたいに大学へ行き資格を取る。でも時代はもっと悪い方に進んでいて、保険で入ったはずの会社に捨てられたり、会社が潰れたり、業種が変わったりして、自分が培ってきた技術が全然役に立たないとか、そんなことが当たり前に起こる。そういう時代にこそ、本当は人文学的な知恵や賢さが必要だと思えます。さっき言った悪い意味での専門性じゃなしに、他の領域でも役に立つ知恵や技が。レヴィ・ストロース(フ

ランスの文化人類学者)が言った「プリコロール」のように、あり合わせで何でもやってしまおうような、したたかさを持つこと。人文学って、正解がないことばかりしつこく考えてきたわけでしょう。哲学や文学や芸術にしても、戦争や政治の歴史にしても。人間が理解できることなんて、もうわずかしかなくて、あとは推測ばかり。そういう学問をやれば、相対論が身につくと思うんだけど…。ただ、学問というのは実際にやってみないと何が見えてくるかわからない。僕らは今振り返って言えるけど、学生さんには気の毒な注文かもしれませんね。

山田 そこに気づいて、すぐに役立つ知識よりも、深く考える忍耐強さを培っていく学生も相当数いるんですけどね。セイカには、上から押しつける教育ではなく、学生の持つ力を生かして共に学び、議論しようという文化があります。教員と学生の関係もフラットで、私も「先生」ではなく「山田さん」「創平さん」と呼ばれます。そういうところも、人文学をやるにはすごくいい環境だと思いますね。

歴史や世界の大きな地図に自分を「マッピング」する

——人文学とは「時間軸の長い学問」なのだと思えます。しかし学生はすぐに役立つ知識や正解を求める。それは社会の風潮がそうさせているようにも思えます。

歴史から今日までの流れも知っておいた方がいいし、日本だけでなく中国のこと、西欧のこと、アフリカのこと…今は直接関係なくても、ちょっと知っておけば、自分たちの将来を考えるヒントになる。世阿弥の「離見の見」じゃないけど、溺れている自分をもう少し大きいスコープのなかで見つめ、位置づけることが、時代に押し潰されないための反撃のやり方で、だから人文学は武器にもなる。大学のなかで最も「闘う学問」なんですよ。

山田 今のお話で思い出したのが、本学でダライ・ラマ14世(チベット仏教の最高位僧)を最初に講演に呼んだ2000年4月のことです。当時は来日について政治的障壁があったため、講演会開催への執拗な抗議や妨害があり、学内から開

催への疑問の声も上がりました。担当者も日々揺れ動く気持ちがあるなか、当時の理事長杉本修一はこう説いたそうです。「大学の存在は国家よりも大きい。わが大学が国家の干渉に屈することがあってはならない」。日本と中国とチベットとか、近代国民国家の枠組みや対立なんて普遍的でもなんでもない。大学はもっと長い時間軸で、はるかに大きいことを考え、やってきたんだから自信を持ちなさい、と。セイカらしい話だと思えます。

鷲田 学問の大きさですよ。ハーバード大学なんか、アメリカの政府よりはるかに古いわけやしね。

「自分は」の枠を超えて「人は」を問う学問

——人文学は先ほどの「マッピング」ではなく、「自分探し」のように見られていることが「社会の役に立たない」イメージにつながっている気がするのですが。

鷲田 自分に固有なもの、自分にしかないものは何か。自分は自分は…って、よく言われますが、僕らが「自分」と呼んでいるものって、すごく社会的に、あるいは時代のなかで編まれていっているものでね。僕がもし明治時代に生まれたら全然違う人間になってますよ。アイデンティティの問題って、それはそれで大事だし、否定はしませんが、そこにこだわり過ぎたら、かえって人間弱くなる。だっ

て自分の内面を見つめても何もないから。そういう意味では、僕が今までで一番しつくりきた人文学の定義は、評論家の大宅映子さんがある講演で言われた言葉です。「死ぬとわかつていけるのに、人はなぜ生きていけるのか。その理由を考える学問です」って。おーこれはわかりやすい、その通りだと。だから人文学をやれば、人はたくましくなれる(笑)。

山田 死ぬとわかつていければ何もなくていいはずですが、そうではなく、いろいろ考えてしまいますし…。

鷲田 どうせ死ぬなら、できるだけおいしい物を食べて…となりそんなものですが、昔の人たちはそうしなかった。それはなんでや？というのを学ぶわけです。先ほどの「自分とは何か」という問いはいつの間にか、自分は何を持っていいか、何ができるかという問いにすりかわってしまってますよ。面接で、「どんな資格を持っていますか」と聞かれるようにね。でも、自分というのは、何を所有しているだけで語れるものじゃない。所有もするけど、人に支えられもする。人とチームをつくって共同して働き、助けたり助けられたり…のインターペンデント(相互依存)な関係なのに、「私とは何か」と言った途端、自分に固有のものは何か、他の人にはない何を持っているかという問いになる。そうすると、ネガティブな

答えにしかならないでしょう。
山田 たいして持っていないからね。
鷲田 だから「自分は」を問うのではな

鷲田 まさにそうで、今、大学に社会から求められることといえば、外部資金をいくら取ってきたか、効率化は達成できているか、どれだけ社会貢献したか…とか、まったく産業界の論理です。だからね。
山田 その風潮に学生を合わせさせるのがいいとはやっぱり思えません。社会に出てもすぐ会社を辞めてしまったり、その後どう生きていけばいいかわからなくなったりするぐらいなら、大学にいる間にもっと悩んだ方がいい。時間軸と言われましたが、学生が大学で人文学を学ぶとき、最初に直面するのがその点です。2000年前のプラトンを読まされたりするので、今までの自分の考え方は時間軸と空間軸が全然違う。高校までは自分の地元しか知らなかったのが、本学ではいきなりアフリカに行ったりして、異なる世界に触れます。そういう体験の方が長い目で見た時、絶対に役立つと思うんです。ただ、世の中の流れとは違っているので、その良さをどう伝えていけばいいんだらうという悩みは常にあるのですが。

鷲田 目の前にはない世界を知ることが、人文学を学ぶ大事な意義です。僕がよくたどるのは、海で溺れた時、周りに島も何もなければ空の星や太陽を見て自分の位置を知るしかない。それと同じで、歴史や世界の大きな流れのなかで自分がどこにいるのかを知ること。自分自身を大きな地図のなかに置き、「マッピング」することが物考える時のよりどころになる。そのためには2000年以上前の

く、大宅さんが言ったように「人は」と大きな問いを立てる方が、人文学にはふさわしいと思うんです。

山田 私も日々、学生と接するなかでそれを感じています。本学には不登校や引きこもり経験のある学生が結構いて、みんな最初は自分について悩んでいます。ところが一緒に書物を読んでいくと、過去にも同じことに悩んでいた人がいる。フィールドに出て調査をすると、自分の個人的だと思っていた問いが、社会的な問いだと気づく瞬間があるんですね。そうなるって自分で勉強して卒論を書くところまでいき、卒業した後自分なりの生き方や進む道を見つけれられる。なので、「個人的なことは政治的である」じゃないですが、出発点は自分だけでも、それを社会化していくのが今の大学教育の大切な役割であり、私が日々やっていることなのかなという気はします。

鷲田 加藤典洋さん(文芸評論家)が面白い話を書いていました。自分の講義で「社会問題とは何か」とレポートの課題を出したら、ある学生が「私が社会問題です」と書いてきたというんです(笑)。こんな私がいる、私がこんなままだでいるこれこそが社会問題だって。素晴らしい、すごく正しい答えだと思いましたね。セイカの人文学部も、みんなが生きる力を身につける場所であってほしい。世界を見つめるために、今よりも少し見晴らしの良い場所に立つための4年間になればいいと、僕は思いますね。(了)



自分の興味や関心を「社会に通用する力」に発展させる 5つのコース



京都の地で時代と人間を見つめる

歴史コース History

京都という歴史を学ぶのに絶好の場所を生かして、歴史上の人物の縁の土地や当時の街道に足を運び、現地調査を行います。研究領域は古代から近代まですべての時代の日本史が対象。歴史に名を残す英雄だけでなく、当時を生きた民衆の視点からも史料を読み解き、過去の人間の生き方から現在・未来のあり方を提唱します。



言葉の世界で、人間の心情に触れる

文学コース Literature

研究対象は、上代から近代までのあらゆる日本文学。小説や詩歌、戯曲、評論など多様な分野の作品講読や作家研究を行います。作品に登場することも多い京都を舞台に、現地調査を通じて学ぶことが特徴です。各時代に生きる人々の文化や精神を理解しながら作品を読み解き、「人間とは何か」という本質的な問いに迫ります。



「いま」を読み解き課題を発見する

社会コース Society

家族、学校、ジェンダー、環境など、自らの悩みや疑問、身近な問題を入り口に、社会現象や人間の行動の要因を掘り下げしていきます。教員には多様な分野の研究者がそろい、関心に応じて知識を深められる環境です。さらに、フィールドワークを通して、数値やデータの分析だけでは気づきにくい問題の本質に迫る力を養います。



海をこえて、新たな世界に出会う

国際文化コース Global Culture

国際都市・京都、そして留学生が多い学内環境を生かして実践的に英語や語学を習得します。さらに2年次には、半年から最大一年間大学を離れ、語学学習に加えて土地の文化や社会課題を現地で調査。世界の課題に向き合う力、どんな国や地域でも自分らしく生き抜ける力を獲得します。



日本と世界を文化でつなぐ

国際日本学コース Japanese Studies

マンガやアニメなどの大衆文化から伝統文化まで、多様な日本文化を、伝統と革新が同居する都市、京都で研究します。その魅力を海外に向けて発信できるよう、語学力の向上を重視していることも特徴です。国家資格である登録日本語教員の免許も取得可能。文化で日本と世界をつなぐ人を育てます。

京都精華大学人文学部

「言葉の力」「自由な視点」「リアルな体験」を重視したカリキュラムと、人間の営みについて探究する5つのコースで、変化の激しいこれからの時代を生き抜く底力を持ち、社会に羽ばたく人を育てます。

人文学科

- 歴史コース
- 文学コース
- 社会コース

国際教養学科

- 国際文化コース
- 国際日本学コース

※コース単位で入試実施予定。
※記載内容は構想中のものであり、変更となる可能性があります。

これからの時代を生き抜くための 新しい人文学

人文学部 2026年4月開設

京都精華大学は1989年に人文学部を開設。2021年には国際文化学部名称を変更しましたが、本学の教育理念に立ち戻り、再度「人文学部」に学部名を変更することとしました。
人文学は「人間とは何か」「どうすれば世界をより良く変えることができるのか」を考える学部です。

京都精華大学では、変化の激しい時代だからこそ、自己を見つめ他者と対話する言葉の力、幅広い視点を基にした粘り強い思考力、自らの足で現地におもむくことで得られる実感に伴う知識、それら人間のもつ根源的な力を引き出す「人文学」を今一度見つめなおし、再提案していきます。

言葉の力

「言葉の力」と「幅広い教養」を身につけ
変化に対応できるベースをつくる

どんなにテクノロジーが進化しても、必要になるのは人間の「言葉の力」。人文学部では、読む・書く・聞く・話す、言語コミュニケーションの基本と、思考のベースとなる教養を身につけることで、「言葉の力」を高めます。

自由な視点

ひとつのテーマにさまざまな角度からアプローチ

たとえば1年次の必修科目「人文学原論」では、「共同体」「他者」「所有」などといった人文学として考えるべきテーマについて、講義と議論をくりかえしながら学びます。歴史、文学、社会、グローバル、文化という多様な角度から物事を考える力を身につけ、自由な視点を手に入れます。

リアルな体験

全員が半年間現地で調査する長期フィールドワーク

2年次に半年間、大学以外の場所で調査・研究する「長期フィールドワーク」。日本・海外の12の国や地域から興味のある土地を選んで、自分の決めたテーマを追究することができます。調査テーマを決め、現地で調べ、集めたデータから分析して自分の意見を発表する経験は、どんな将来に進んでも必ず生かせる力となります。

特集対談の こぼれ話

本特集にご登場いただいた鷲田清一さんは、朝日新聞1面の「折々のことば」を長く担当されています。2016年には今回の対談相手である山田創平の言葉〈表現をするということは…「社会を変える方法」を手にするということです〉を取り上げられました。鷲田さんが「みずみずしい定義」と評したその言葉は、本学Webサイト教員ページからの引用でした。

特集対談の こぼれ話

「セイカの魅力は人文と芸術系の学部が隣り合っていることだ」と鷲田さんは言います。人文学も、文書研究に没頭し、専門的に掘り下げていくと「虚学」になりやすい。そうならないために、実際に手を動かして表現するアートの発想や経験が重要だと。自身も美術作家として表現活動をする山田も、これに大きくうなずいていました。

DEPARTMENT
OF
GAME DESIGN

できることから一歩ずつ。
縁を大切に精一杯つとめたい。



マンガ家たちの「やりたい」を
全力で叶えていきたい。

長島 聡子さん
Nagashima Satoko

韓国大邱大学校 造形藝術大学
助教授

芸術学部造形学科
洋画専門分野
2003年卒業

卒業生インタビュー

独自の道を歩む京都
現在の活動や今後の夢、

精華大学の卒業生に、
セイカの思い出を伺いました。

高田 雄真さん
Takada Yuma

株式会社秋田書店
少年チャンピオン月刊誌編集部

人文学部総合人文学科
2017年卒業



ゲームデザイナーであるセイカの同級生を招いて、現場や業界についてレクチャーしてもらった

現在、韓国大邱大学校・造形藝術大学（※）ゲーム学科の教員として、基礎教育を担当している長島聡子さん。コンピュータグラフィックスを用いたコンセプトアート制作の実績が評価され、大邱大学校からPCソフトの使い方を教える授業の依頼があり、2013年に韓国へと渡りました。

授業は英語でよいという条件でしたが、韓国語を話せた方が学生により伝わると感じて、学内にある語学学校に通学するように。

「習ったことはすぐに授業のなかで使い、何とか5、6年目には8割は韓国語で授業ができるようになりました。日本のゲームやアニメに興味のある学生も多いので、時には日本語を交えたり、日本のコンテンツ事情や背景を話したりすることも。みんな熱心に聞いてくれます」

今年は急遽、新しく別のカリキュラムを担当することに。「ゲームのキャラク

今年4月から秋田書店に就職し、マンガ編集の現場で働き始めた高田雄真さん。前職では総合出版社でライトノベルやコミカライズ編集に携わり、着々とキャリアを積み重ねている高田さんは、中学時代から「編集者」が夢でした。

「きっかけは『文学少女』と死にたがりの道化」という小説との出会いでした。この作品のヒロインである天野遠子が最後に編集者の道を選ぶのですが、その姿に憧れて自分もこの職業に就きたいと思うようになりました」

セイカには片道2時間半かけて通学していましたが、「編集者になるには幅広い知識があったほうがいい」と、カバンはいつも小説やマンガでいっぱい。4年間とにかくたくさん本を読みました。卒業論文ではこれまでに出版されたマンガ雑誌の目次をまとめ、それぞれの傾向を研究。出版社をめざして就職活動はしますが、その目標はすぐには叶いませんでした。そこで、今後は電子書籍が伸びると予想し、システム開発会社に入社します。

セイカの思い出

プロのクリエイターを招いた特別授業。つくり手の考え方やこだわりなど、大学時代の授業メモは今でも読み返します。



セイカの思い出

野外作品展を友人とともに企画。写真インスタレーション作品を食堂前に展示したことはいい思い出になっています。



ターデザインなど、自分の専門分野ではないことを教えることになったので、勉強しながら授業をしています」とのことですが、きっと一段と努力が必要な状況。苦勞もあるのでは？と伺うと、「新しいことを始めるのに抵抗がないんです。これはセイカのおかげかもしれません」と朗らかに語ってくれました。

「セイカでは絵画表現以外にも、版画など、いろんな表現手法を学びました。同時に、先生方からは創作にオリジナリティを求められたので、感性が鍛えられたと思います」

アートとは何か、すでにある作品と自分の作品は何が違うのか。そのなかで、「いかに楽しみながら創作していくか」を繰り返し考え過ごしたセイカでの日々は、長島さんの大きな糧になっています。自己研鑽を積みながら着実に歩んでいる長島さん。教員のかたわら制作も続け、日本と韓国の芸術交流をはかる展覧会にも積極的に参加されています。きっとこれからも、一歩ずつ自身の道を歩いていけることでしょう。

※韓国の「大学」は日本でいう「学部」のこと

「本当にやりたいことは違うので、しんどい時もありました。でも、この経験が出版業界では優位にはたらくはずだと信じていましたね」

そして転職し、嗜られて編集者に。前職では主にWebで発信された読み物の書籍化を担当し、現職の秋田書店ではマンガ雑誌の編集業務を中心に行っています。まだ入社して間もない高田さんですが、「プロのマンガ家さんと話す時間はとても楽しい」と笑顔で語ります。

「何かを生み出そうとしている人が好きなんです。ベテランの作家でも、年下の若い作家でも、読者として思ったことはちゃんと伝え、対等に話をするよう気をつけています。いまは少年誌の担当ですが、少女誌や青年誌、なんでも読みます。ジャンルにこだわらず、原作者のやりたいことを叶えていけたら」

最後に先輩にむけて、「一人でも多くのセイカ出身マンガ家と一緒に仕事したいと思っています」とメッセージをくれました。近い将来、その作品たちが書店に並ぶことを心待ちにしています。

コミティア（自主制作漫画誌展示即売会）の出張ブース。編集者として、作家と真摯に向き合う



セイカから世界へ

— 教員研究紹介 —

個性豊かな京都精華大学の教員たちが、自身の研究テーマについて語る連載の第二回。今回は、文化人類学や表象文化論、民俗学を専門とする姜竣先生です。韓国にルーツを持つ姜先生は、外からと内からの双方の視点を持った自由な発想で、日本社会を読み解いています。

KEYWORD
かどづ
「門付け」とは？

人々の家を訪ねて芸能を披露し、金品の報酬を得る大道芸の一種。人形回しや獅子舞、歌や楽器などが知られる。「正月などを祝う儀礼として行われることが多く、それ以外の時期には芸能民たちは差別されていました」(姜先生)



姜竣(かんじゅん) マンガ学部/大学院マンガ研究科
日本の紙芝居やマンガ史のほか、メディア論、ポップカルチャーの消費、(韓国) サブカルチャーについての研究を手がける。近年は「ストリート人類学」などのテーマを通じ、デザインとアートについて考えている。

無駄や余白が失われ、窮屈になっていく現代日本。過去を振り返りながら、今への問題提起を続ける。

なぜ他者を排除しようとするのか
伝統文化やアートから紐解く

1986年に留学生として来日した姜先生は、近年の日本についてこう語る。

「旧来の場所やコミュニティに属さない人にとって、窮屈な空気が強まっていると感じます。ホームレスの数は増えているのに、街は彼らの居場所をなくす工夫を凝らしている。人口が減っているのに、外国人へのヘイトは勢いを増している。国内外を移動して暮らす私は、この動きを不思議に感じます。私たちの魂は場所に縛られることなく自由であるべきなのに、定住社会はなぜ場所にこだわり、他者を排除しようとするのでしょうか」

そこで姜先生は今、自身のテーマの一つである「ストリート人類学」に寄せて、「無駄」や「無駄」を研究している。システム化が進んだ現代社会は無駄が減り、ホームレスや外国人など、遊動性を持つ人々を受け入れる余白も少なくなってきた。では過去はどうだったのか。例えば季節の儀礼だった「門付け」は遊動する芸能者によって行われ、人々は彼らを歓迎と敵対の双方をもって受け入れてい

「自由さ」を武器にして、
韓国のことも振り下げたい

今後の目標は、もう一つの拠点である韓国についての本を書くことだ。「なぜ韓国の大統領は似たような末路を迎えるのか、政治に国民が熱狂するのはなぜなのか。日本人からもよく質問されることを、日韓双方を知る立場でまとめたのです」

二つの国の実情を熟知した上で、観察者として問題提起できることは、姜先生の大きな強みだ。だが最大の武器は、自身でも述べる場所や国に縛られない発想の自由さだろう。それこそが未来の希望だとも語ってくれた。

「K-POPと格安航空会社のおかげで、日韓の若者の行き来が盛んになりましたよね。彼らは両国の難しい政治的問題もうまくいなして、生きた交流を図っている。その自由なスタイルがとても頼もしいと思います」

「姜先生の研究」を知るための3冊！

『マンガ学部式メディア文化論 講義…絵と声と文字の相関から学ぶ』(青弓社)は、講義の教科書として使用している自著。学生たちが我がごととして人類学を学べるよう、多くの若者にとってフックになる記述を盛り込んだ。『贈与論』(マルセル・モース/岩波書店)と『呪われた部分 有用性の限界』(ジョルジュ・バタイユ/ちくま学芸文庫)は、いずれも研究・書籍執筆中の『無為』(仮題)の参考になっているもの。とくに後者は姜先生自身でバタイユの年表を作りながら、本当に彼が伝えたかったことを丁寧に探っている。



参考書籍には姜先生による書き込みや付箋がびっしり。自由な発想を支える地道な研究の姿勢がうかがえる

木野からヤツホー



あの先生元気がな…？
そう思っている卒業生のみなさんへ、セイカの教員からのメッセージです。



服部 静枝
国際文化学部 人文学科
(環境マネジメント/CSR論/老舗研究)

「持続可能な社会と企業」をテーマに企業訪問を再開

卒業生の皆さん、お久しぶりです！早いもので、京都精華大学での教員生活もこの10月で21年になります。かつて授業で学生の皆さんと一緒に本学的环境監査を行ったり、企業や自治体などの組織に向いて環境マネジメントシステムの構築支援を行ってもらったことが懐かしく思い出されます。カリキュラム変更後も、「持続可能な社会と企業」をテーマにゼミを運営しています。2020年の新型コロナウイルス感染拡大でしばらく動けなかった時期もありましたが、ゼミでの企業訪問も今年から本格的に再開しました。近くにいらっしゃることがあれば是非お立ち寄りください。



2年生のゼミの企業訪問にて



中川 裕孝
芸術学部 テキスタイル専攻
(テキスタイルアーティスト)

「縫い展」は10回目！「縫い」から広がる活動の輪

「縫い」というジャンルを授業に取り入れ12年が経ちました。大学院生、卒業生、教員を中心とする「縫い展」は、コンスタントに制作を続ける良い機会になっています。また、今年度から「Tシャツクラブ」なるものを立ち上げ、在学生、大学院生、教員という構成で「シルクスクリーン+縫いTシャツ展」を開催。今年は、桂川周辺の風景をモチーフにした「風ヲ縫ウ。」という個展を京都で行い、来年度は同タイトルで北海道の美術館で開催予定です。現在は刺繍に夢中で、大きなリュックサックを新調し、いつ何時どこでも刺繍ができるよう万全の装備で移動しています。



「風ヲ縫ウ。」に向けた制作のひとつ



田中 圭一
マンガ学部 新世代マンガコース
(マンガ家)

夢を叶えるために決意！憧れの街に引越し

横浜市の「港北ニュータウン」に引越しました。私は今まで会社勤めをしつつマンガ家をやっていたこともあって、住む場所は勤務先から1時間以内で乗り換えが少ないことを条件に決めていました。つまり住環境というのは二の次だったのです。でも、人生で一度くらい「憧れの街に住む」という条件は度外視して以前から憧れていた港北ニュータウンへの引越しを決めました。幸い、新幹線の新横浜駅にも近く京都への移動も楽な場所でした。自然が多く建物もオシャレで街並みも美しく、引越して本当によかったです。



街並みが美しい港北ニュータウン

私のお気に入り

『天才バカボン』の作者、赤塚不二夫先生の社屋が取り壊しになる際の展示会にて。ギャグマンガ家として至福の瞬間でした！



私のお気に入り

幼稚園の頃使っていたお弁当箱。今は刺繍の道具箱



私のお気に入り

母や祖母の影響で、幼い頃から慣れ親しんできた和服。着物の一つひとつに思い出があります



ギャラリーTerra-Sでは申請展や企画展を多数開催

ギャラリーTerra-Sでは、前期に在学生および教員が代表者となって企画・実施する申請展を6件、ギャラリー主催の企画展を1件、開催しました。在学生の申請としては、「あめつちのおもい」(5月10日〜18日)、「〇」(6月7日〜15日)など、芸術学部生の意欲的な利用が目立ちました。教員の申請(出品者は在学生を含む)としては、「生駒泰充展」(4月19日〜27日)、「VISUAL PRODUCT 2023『6/5』」(5月10日〜18日)、小田隆展「Oil Painting」・小田研究室大学院生合同展「優美な屍骸」(5月24日〜6月1日)、「合同陶芸展2024」(8月27日〜31日)など、画業の振り返りや授業の成



撮影:花戸麻衣

- 「生駒泰充展」
2024年4月19日(金)〜27日(土)
- 「あめつちのおもい」
2024年5月10日(金)〜18日(土)
- 「VISUAL PRODUCT 2023『6/5』」
2024年5月10日(金)〜18日(土)
- 小田隆展「Oil Painting」
小田研究室大学院生合同展「優美な屍骸」
2024年5月24日(金)〜6月1日(土)
- 「〇」
2024年6月7日(金)〜15日(土)
- 京都精華大学×ソウル市立大学校交流展
「828.45K-Come & Go」
2024年7月5日(金)〜8月4日(日)
- 「合同陶芸展2024」
2024年8月27日(火)〜31日(土)

果展、他大学との交流展などさまざまな制作・研究成果の発表の場となりました。
また、本学とソウル市立大学校の教員、在学生、卒業生による交流展「828.45K-Come & Go」(7月5日〜8月4日)では、総勢30名の日韓のアーティストが参加し、社会と環境の急激な変化を両国から見つめ、独自の問題意識や世界観を作品で表現しました。会期中には1000人を超える学内外の来場者があり、メディアにも取り上げられるなど多数の反響を得ました。後期も引き続き、さまざまな展覧会の実施を通して、アートに触れるきっかけを広く提供していきます。

「越後妻有アートトリエンナーレ」に教員や学生、卒業生らが多数出展



「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2024」
2024年7月13日(土)〜11月10日(日)

7月13日から11月10日まで「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2024」が開催されました。この芸術祭は新潟県の地域活性化事業として2000年に始まり、本学も2009年から継続して出展しています。
今年も芸術学部教員の吉野央子を中心に卒業生有志が参加しました。古い民家の1階から天井まで黒い毛糸を張り巡らし、地元の人から集めた物を編み込んだ塩田千春さん、陶の色彩や質感を生かし、生命力あふれる立体作品を発表した榎木野淑子さんなど、卒業生の作品もいたるところに展示されました。

また、これまで継続的に取り組んできた「枯木又プロジェクト」では、廃校となった校舎を舞台に本学の関係者が作品を展開しました。版画卒業生の衣川泰典さんは新潟で採集した石灰岩にその土地の風景を掘ったリトグラフ作品を展示。また、採集のプロセスを映像作品として視覚化しました。洋画卒業生の金沢寿美さんは新聞紙の紙面を黒鉛で塗りつぶしながら描く「新聞紙のドロ잉」を用いた作品で、宇宙のような幻想的な空間をつくりあげました。昨年ストーリーマンガコースを卒業したばかりの「issa」さんはフロア全体を使ってマンガの技法を生かしたインスタレーションを発表。匠巻の世界観で話題を呼びました。

本学と京都国際マンガミュージアムで日本マンガ学会を開催



「日本マンガ学会 第23回大会」
2024年6月22日(土)、23日(日)
京都精華大学、京都国際マンガミュージアム

6月22日、23日に日本マンガ学会第23回大会が行われました。22日の研究発表は本学が、23日のシンポジウムは京都市と本学で運営する京都国際マンガミュージアムが会場となり、2日間で約500名が参加しました。
日本マンガ学会は、さまざまな分野の研究者や専門家が集まり、マンガ研究の深化・拡大や研究成果の体系的な整理・公開を行っています。年に1度2日にわたって日本マンガ学会大会を実施しており、ゲストを招いてシンポジウムなどを開催。研究者どうしの交流の機会にもなっています。
22日の研究発表には、本学のメディア表現学部教員の戸田康太、

大学院に在籍するアディルバエワ・ミレーナさん、森田百秋さん、森董さんの4名が参加。学会員だけでなく、マンガに関心のある方々や京都で学ぶ大学生も聴講し、会場は熱気にあふれていました。
23日のシンポジウムは「マンガと「展示」」をテーマに開催。第1部は「マンガを「展示」するということ」、第2部は「ひろがりゆくへマンガ展」のかたち」の2部構成で実施し、第2部には本学のマンガ学部教員で国際マンガ研究センター員のイトウユウも参加しました。近年国内外で盛況を博しているマンガ展をめぐる現状について、実践と理論の両面から捉え直す機会となりました。

夏のオープンキャンパスで過去最高の来場者数を記録



オープンキャンパス
2024年8月3日(土)、4日(日)

8月3日、4日にオープンキャンパスを開催し、キャンパスは大いににぎわいました。2日間を通じて約3000名の方にご来場いただき、過去最高の来場者数を記録しました。

「リア説明会」では、8月3日に卒業生ゲストを招いて開催。CMやアーティストのミュージックビデオ、ドラマのオープニングムービーなどを手掛ける、映像ディレクターの高瀬裕介さんにお越しいただき、第一線で活躍するクリエイターの話聞くことができる貴重な時間となりました。

本学での学びの内容や入試に関する説明会、大学の授業を体験することができる模擬授業や、教員や学生と直接話をしたり作品を観たりすることができる学科・コース見学、入試や学生生活・下宿などについて職員に相談できる個別相談コーナーなど、さまざまな企画を実施。総合型選抜入試対策として開催した「自己推薦書講座」は、受験生だけでなく保護者の方からも好評でした。また、「キャ

今年度最後のオープンキャンパスは2025年2月15日、16日を予定しており、同時期に「京都精華大学展2025―卒業・修了発表展―」も開催します。どなたでも入場いただけますので、ぜひ学生たちの4年間の学びの集大成を親に、キャンパスへ足をお運びください。

京都精華大学展2025 -卒業・修了発表展-

2025年2月12日(水)~2月16日(日)

〔会場〕京都精華大学
※土、日はオープンキャンパス同時開催

京都精華大学ギャラリーTerra-S ※入場無料

- Seika Artist File #2
「Imagined Sceneries -7つの心象風景をめぐる」
11月15日(金)~12月21日(土)
- etc.../かくれんぼの森
2025年1月10日(金)~1月18日(土)
- 光の届く/ポール・コックス ポスター展
2025年1月24日(金)~1月29日(水)
- 管派/穴派
2025年2月25日(火)~3月7日(金)
- 高校生のための第6回創作作品コンペティション
「SEIKA AWARD 2025」入選作品展
2025年3月15日(土)~3月23日(日)

〔問い合わせ先〕
京都精華大学ギャラリーTerra-S(明窓館3F)
☎075-702-5263



京都国際マンガミュージアム

- 文化庁メディア芸術連携基盤等整備推進事業成果発表展
「のこす!!いかす!!マンガ・アニメ・ゲーム展」
11月23日(土)~2025年3月31日(月)

〔問い合わせ先〕
京都国際マンガミュージアム
☎075-254-7414



その他公開講座

- アセンブリーアワー講演会
- 公開講座ガーデン
など



サテライトスペースkara-S

- ショップ
 - ギャラリー
- 在学生、卒業生の作品が並びます。



活躍する在学生、卒業生の情報を募集しています。

情報をお持ちの方は、広報グループまでお知らせください。

- 京都精華大学 ウェブサイト
<https://www.kyoto-seika.ac.jp>
- 広報グループ
kouhou@kyoto-seika.ac.jp



News 05



アニメーションコース卒業生たちの卒業制作作品がアワードや映画祭にて受賞

今年3月にマンガ学部アニメーションコースを卒業した学生たちの卒業制作作品が、学外で多数受賞しています。「高知アニメクリエイターアワード 2024」では多くの作品が受賞。そのなかでもキムソンジエさん、青井愛佳さん、喜多一葉さん、北村昂大さんによる『REDMAN』がグランプリに選ばれました。他にも『家庭内権力抗争』『last journey』『eau de parfum』『春にくゆる』の4作品が入選し、高い評価を受けました。また、同コース卒業生・藤田みのりさんによる『芋虫』が、「第35回東京学生映画祭」アニメーション部門にてグランプリに選ばれました。この映画祭は、学生のみで企画・運営を行う、日本で最も長い歴史のある国内最大規模の学生映画祭です。みなさん本当におめでとございました。

News 06



学生たちがキャンパス内の物理的障壁(バリア)を調査

10月19日、20日の2日間にわたり、キャンパスの段差や傾斜といった、通行の物理的障壁(バリア)を調べる「学内バリア調査」を実施しました。障害学生支援室が主催したもので、車椅子を使用したり、歩行に困難がある学生や教職員・来校者が不自由に感じる場所を調査し、施設改善に向けた提案書にまとめることを目標としています。当日は11名の学生が参加し、グループに分かれて学内を調査。学生たちは車椅子に乗りして学内を移動し、普段は気に留めない小さな段差や、通路にはみ出るように置かれた荷物等が、いかに通行の妨げになっているかを発見しました。本プロジェクトは今後も継続し、学内の施設改善および構成員の意識啓発にむけて取り組んでいく予定です。

News 03



「木野祭」来場者3,000人超え 秋晴れのなか大いににぎわう

11月3日と4日の2日間、秋晴れのなか、学園祭「木野祭」が開催されました。今年のテーマは、「閃光突破Flash Prism」。それぞれの輝きを拡散する舞台となるよう思いが込められました。また今年は実行委員が精力的に広報活動を行い、京都市営地下鉄の駅ナカ大型ビジョンを活用したPR広告も掲出しました。当日はサークルや有志団体ごとに出店した模擬店や作品販売が並び、活気あふれる雰囲気。毎年大人気の陶芸専攻の陶器市では学生が制作した器やグッズがところ狭しと並び、来場者の足をとめました。明窓館の大ホールとM-104、屋外の水上ステージでは個性豊かなライブパフォーマンスが繰り広げられ、盛り上がる企画が満載。出演者も来場者も大いに楽しんだ木野祭になりました。

News 04



世界的に有名なゲームスタジオのクリエイティブ・ディレクターが授業に登壇

『風ノ旅ビト』『Sky 星を紡ぐ子どもたち』などの世界的人気ゲームを生んできた「thatgamecompany」の創設者兼クリエイティブディレクターであるジェノヴァ・チェン氏を招いたトークイベントを、7月8日、全学共通科目「クリエイティブの現場」の特別講座として開催しました。暴力や破壊といった攻撃的な刺激ではなく、人種や性別といった属性を超えて人とつながる、共感しあうことに重きが置かれたゲーム作品を発表してきたジェノヴァ氏。講義では、その思考の根幹から、開発時の試行錯誤、ゲームを通じてよりよき現実世界をつくらうとする取り組みなどが語られ、メッセージにあふれた貴重な時間になりました。表現を磨き、世界に挑戦しようとする学生たちにとって、視座を高めるまたとない機会となりました。

News 01



《巡る記憶》(2022/2024)

現代美術家として活躍する本学卒業生・塩田千春さんの個展が大阪で開催

現代美術家として活躍する卒業生、塩田千春さんの個展「塩田千春 つながる私(アイ)」が、9月14日から12月1日にかけて大阪中之島美術館で開催されました。本展覧会は、全世界的な感染症の蔓延を経て、否応なしに意識した他者との「つながり」がテーマ。インスタレーションを中心に絵画、ドローイングや立体作品、映像など多様な手法を用いた作品を展開しました。塩田さんは本学を卒業後、拠点をベルリンに移し、世界各地で個展を開催するほか、国際的な芸術祭にも多数参加。生と死、存在、記憶など人間の根源的な問いをテーマに、精力的に作品を発表し続けています。7月には、独立行政法人国際交流基金が実施する「2024年度国際交流基金賞」も受賞されました。

News 02



国際文化学部生らが海外留学プログラムから無事帰国

グローバルスタディーズ学科から25名、人間環境デザインプログラムから5名、合計30名の学生が海外留学プログラムを終えました。渡航先はアメリカ、スペイン、トルコ、韓国、台湾、フィリピン、ニュージーランドとさまざま。期間は地域により異なり、2月から4月にかけて出国。5月から7月にかけて無事に順次、帰国しました。本プログラムは、人文学部の設立当初から行われてきた海外フィールドワークを発展させた取り組みです。学生たちは長期間現地に滞在し、テーマにもとづき調査研究を行います。未知の場所を訪れ、これまでに出会ったことのない文化や価値観にふれた経験は、学生たちの視野を広げ、新しい自分を発見する機会になったことでしょう。これからの活躍を期待しています。

～ご支援くださる皆様へ～
(ご寄付のお願い)

本学で学ぶ多くの学生の生活支援、本学のさらなる教育・研究活動の充実のため、温かいご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

● 寄付募集Webサイト

クレジットカード決済、コンビニ決済、インターネットバンキング決済など、ご希望の方法をご利用いただけます。



● リサイクル募金Webサイト(きしゃぼん)

本やDVDに加え、貴金属などの換金査定額をご寄付となります。

● 京都市ふるさと納税を通じたご支援 ご利用が増えています

『『大学のまち京都・学生のまち京都』の推進～市内大学と協働!学生さんの挑戦を応援!～』をお選びいただき、応援したい大学に京都精華大学をご指定ください。ふるさと納税の寄付金の一部が本学の社会貢献活動の費用に充てられます。

2023年度は、法人・個人あわせて38,734,844円のご寄付をいただきました。加えて、リサイクル募金は179,122円分、ふるさと納税を通じたご支援には7,317,000円をお寄せいただきました。心より感謝申し上げます。2024年度も、本学のめざす「表現で世界を変える」教育・研究活動のために、ぜひみなさまにお力添えいただければ幸いです。ご支援・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

お問い合わせ

京都精華大学 経営企画グループ 寄付募集担当

E-mail: donation@kyoto-seika.ac.jp

TEL 075-702-5201

FAX 075-702-5391

京都精華大学

国際文化学部
人文学科
グローバルスタディーズ学科

メディア表現学部
メディア表現学科

芸術学部
造形学科

デザイン学部
イラスト学科
ビジュアルデザイン学科
プロダクトデザイン学科
建築学科

マンガ学部
マンガ学科
アニメーション学科

人間環境デザインプログラム

人文学部
総合人文学科

ポピュラーカルチャー学部
ポピュラーカルチャー学科

大学院
芸術研究科
デザイン研究科
マンガ研究科
人文学研究科

表紙の作品

『不二の表れ — ネオ胎蔵曼荼羅』
2023年度 修了制作
ツピンデン ティム 健人さん(芸術学部 版画専攻)
素材: 和紙、インクジェットプリント
サイズ: 220cm×180cm



本作は、東寺の両界曼荼羅をモチーフにしたインスタレーション『不二の表れ』の一部として展示したものです。まず曼荼羅について深く調べ、その情報からイメージを生成するようAIに指示しました。そして出力した200枚以上のさまざまな図を重ね合わせて完成した作品です。曼荼羅を再解釈し、生成AIと人間の関係性をはかりました。

木野通信

KINO PRESS.

木野通信 第83号
2024年12月13日 発行

京都精華大学 広報グループ
〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137

『木野通信』送付先の変更について

ご住所等の変更を希望される方は、木野会ホームページまたはFAXで変更事項をご連絡ください。

学校法人京都精華大学
経営企画グループ 木野会事務局
<https://seikajin.com>
E-mail: kinokai@kyoto-seika.ac.jp
FAX 075-702-5391

